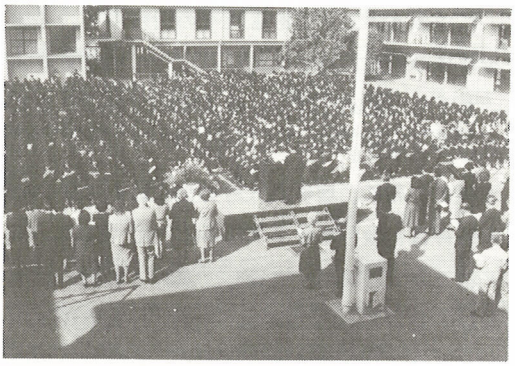
史料室だより No. 24

東洋英和女学院史料室委員会
発　行　1985年3月11日

ー百年の歩みの中でー

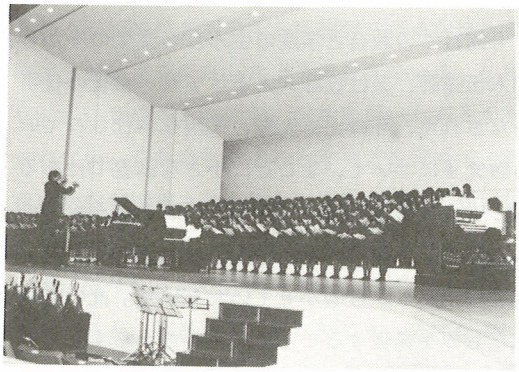
百周年記念行事　　1984年11月～12月

記念式典　11月6日
於　中高部新体育館



記念礼拝　11月5日
於　小学部校庭

記念講演会　11月7日
於 マーガレット・クレーグ
記念講堂



記念音楽会　12月6日
於 昭和女子大人見記念講堂

母校の百周年を終えて

上田　朝

鳥居坂教会は一昨年の秋、東洋英和女学院は昨秋、それぞれ百周年の式典と祝会を持った。そうした記念の礼拝と「東洋英和女学院百年史」を通し、歴代の校長、宣教師、先輩の献身的な奉仕を、改めて偲んでいる。

今から七十五年前、明治四十三年（一九一〇）の春、父、倉長巍は麻布教会（現鳥居坂教会）に招聘され、私共家族は旧牧師館に住むようになった。私が数え年五才であったその引越の日、鳥居坂を洋装の御婦人が歩いていらしたのを覚えている。おそらく初めて拝見した英和の宣教師のお姿であったと思う。

百年史の席に、理事長大村勇先生は「本学院建学の精神は『敬神奉仕』である」と述べられている。

又第五章では次の文を通し、英和と教会の戦前の関係を知ることが出来る。「創立以来東洋英和と麻布教会とは密接な関係にあり、日曜日は出校日として麻布教会の礼拝、日曜学校に出席したわけだから、教会の歴代牧師は英和のキリスト教教育の指導者であったが、戦時下に日曜日出校は廃止され、教会との直接的関係は断たれて戦後を迎えた。」

今回はこの教会と学院の生んだ卒業生の中から、婦人伝道師、又は牧師夫人として尊い奉仕の仕事をなされた、今は亡き先輩、又現在奉仕されている教え子について、まことに小さな調査ではあるが、中・高卒にしぼってリスト作成を試み始めた。短大卒の方々のそれは短期間には無理と思われ、此度は残念ながら省かせていただいた。此の未完成なものを発表することには、少なからずためらいを感じるのである。が、やがて有能な方々による多くの記録の加わることを期待し、私は先ず一九八五年二月現在で始めた次第である。

百年史の七十三ページ（第一章、創業期のキリスト教教育）に次の一行がある。「佐橋あさ子は、伝道部最初のバイブル・ウーマンとして働いた。」

島田さと、初期の卒業生で婦人伝道師として永く奉仕され七十二才で召天。昭和十八年召天。

旧北村雪（比屋根安定氏夫人）明治四十一年卒。結婚されるまで麻布教会の婦人伝道師。昭和二十三年召天。

旧岩崎春江（宮城定牧師夫人）明治四十四年卒、御夫妻とも牧師。昭和五十二年召天。

旧佐藤たけじ（山口武夫人）大正五年卒、山口夫人になられる前、麻布教会で婦人伝道師。昭和十五年召天。

旧内垣泰子（浅野順一牧師夫人）大正十年卒、昨年五月十一日召天。英和に在学中、父から受洗。学生時代から牧師夫人になりたいとの願望を持っていらした。今年、記念の本が出版される予定。そのため私も拙文ながらペンをとり御依頼に応えた。さて、史料室の朽木さんからお電話があったのはその数日後のことであった。実は身辺の色々な事情から、原稿をお断りしようかとも迷ったが、結局私を駆りたてたのは、正に泰子夫人と、延いては母校卒業生で、現在の牧師夫人方に対する敬意と尊敬からである。

旧土屋政代（阿部寿次牧師夫人）大正十二年卒。昭和二十年召天。

旧風波見光子（原田育三牧師夫人）大正十三年卒。中国で憲兵隊に捕われ射殺寸前の経験の持ち主。

加藤照、昭和四年卒、伝道師として阿佐ケ谷教会で四十年にわたる御奉仕。

旧浜崎謝恵（小池正牧師夫人）同十三年卒、宇都宮教会で御奉仕。

旧宮沢照子（奥興牧師夫人）同十九年卒、三軒茶屋教会で御奉仕。

ここで再び第五章「戦後のキリスト教教育」四百六十七ページの次の記事に戻りたい。「戦後の

キリスト教教育再建のため、三軒茶屋教会の奥興牧師が招かれ、中略、西片町教会の鈴木正久牧師もそのひとりで、彼の燃烈な個性は多感な高等部三年生に大きな影響を与えた。当時共産主義思想に傾いた数名の生徒の心をもよく把握し善導した。そうしたなかのひとりは受洗するに至り、卒業後牧師夫人となった。」

旧上田佐保子（川名勇牧師夫人）同二十三年卒。桜新町教会で御奉仕。

旧鈴木富美子（中村利成牧師夫人）同二十三年卒。大津市石山教会で御奉仕。

川崎綾子、同二十三年卒、戦時中は病弱のため長欠だった川崎さんが、今お一人で都留市の谷村教会で牧会に専念されていることはおどろきであり、又喜びでもある。

旧金井安子（禿準一郎牧師夫人）同三十九年卒。生田教会で御奉仕。

旧岡野千世（山北宣久牧師夫人）同四十一年卒。聖ケ丘教会で御奉仕。

旧清水啓子（石丸泰樹牧師夫人）同四十一年卒、上富坂教会で御奉仕。

終りに、キリスト教の伝道のためつくされ、今は故人となられた東洋英和の先輩に心よりの敬意を表すと共に、現在各地の教会で奉仕されている卒業生の方々に心からの感謝をささげ、御健康をいのるものである。　　昭和六十年二月八日

行事あれこれ

中野　登美子

５０年、１００年という節目を境に変化は起り勝ちである。それは時代の流れに沿う必然的なものを初めとして、好ましい変化、望ましからぬ変化、急激なもの、目に見えぬうちに除々に変るものなど様々である。その中で確固として変らないもの、変ってはならぬものを維持してゆくことは大事業と云えるだろう。東洋英和に於てそれが何であるかを云うことは易く、行うは洵に難かしい。ここでは、前者の変っても差し支えのないもので、変って来たもの、これからも変るであろうものの幾つかについて書き留めておきたいと思う。学校の制度、カリキュラム、学生、生徒の活動の仕方、服装、生活の仕方、校舎の変遷などについては、５０年史、１００年史などに詳しく見ることが出来る。

個人的なことを書き立てるのはおこがましいが、私の六十年余りの生涯のうち、約五十年は東洋英和との深い関わりを与えられたものであった。即ち、五十周年記念の年に高等女学校に入学して以来のことである。公立の小学校から入学して、非常に新しく展開したものはキリスト教の教育であった。毎朝の礼拝を基盤として、聖書の授業、日曜礼拝への出席、ＹＷＣＡ活動、修養会、学芸会に於ける聖劇（特に五十周年記念の時の「十字架を負う者」は特異であった。）又、公立では大切な行事として守られていた四大節（国家の祝日）の式日に学校がお休みであったこと、随って、教育勅語奉読とか、御真影奉拝のなかったこと、などは強烈な印象を与えた。尤も、最後の三件は、昭和十三年に校長が日本人に交替される前後から実施されるようになったように覚えている。しかし、古い昔のことなので、記憶ちがいもあるかも知れない。これから記すことすべてを含めて、正確な状況が把握された場合には御訂正をお願いしたい。

思い出すままに記してみると、先ず、運動会は勿論のこと、遠足に出掛けた時にも、先ず広場に集まって野外礼拝が行われる。その時選ばれる聖書は大体詩篇の十九篇が多かった。讃美歌は、「空はほがらに、地は美わしく」―旧讃美歌 359番の曲であった。修学旅行では朝夕必ず礼拝が守られ、これは現在も続いていて、特に北海道旅行な

ど、一週間以上にわたる場合は、日曜日には原則としてその地の教会の夕拝に出席させて頂く。しかし、遠足での礼拝は最近二十年位、守られていないと思う。卒業学年の修養会は私の覚えている限り重点的に行われている。戦前は学校で二、三日続けて行われていたが、昭和三十年代頃から、宿泊行事となった。毎朝の礼拝は英和の有史以来、戦時中と雖も跡絶えたことはないのではないか。宣教師の先生が校長をして居られた頃は、授業の第二校時と第三校時の間に行われていたが、その後は第一校時前に変った。宣教師の先生方に依る英語礼拝も、永い間、週一回であったが、最近十年位は、先生の数も減ったので、月に一度位になって来た。所要時間は大体二十分位である。この朝の礼拝は中高部に於ては自由出席となったことはない。主として教職員が担当するが、先生の指導のもと、信徒の生徒が責任を持つこともある。礼拝時の奏楽に関しては、戦前はずっとピアノが用いられていたが、（昭和九年以前のことはどうであっただろうか？）戦後、日本楽器の十三個ストップ付のオルガンが用いられるようになった。しかし、一時、M・C講堂に七百人から九百人程の生徒を収容して、中高部一斉に礼拝をしていた昭和二十年代の後半、オルガンの音が吸収されて音量不足となった時、楽器屋の勧めで、拡声装置をつけた時代があった。ジェミコとか呼んだ様に思う。そのために、ステージの上部にある書庫から窓をあけて、スピーカーの幕を張ったのが、ステージ正面の上部にある、巾50㎝高さ30㎝位に見える茶色の木枠のついた部分であることを御存知の方は少いと思う。その後、グランドピアノの大型が購入されて、これを用いた期間が十数年続いたが、そのうち、クロダトーンというものが開発され、礼拝にふさわしい楽器として選ばれ、今日に至っている。爾来、オルガンの専門家の音楽の先生方に恵まれ、生徒の中にもオルガン科志望者が次々と生まれるようになった。

日曜日の礼拝については、私が生徒であった頃、洗礼を受けている者は自分の所属教会に出席することが許されていたが、それは僅かな人数で、それ以外は全員登校した。一、二年生は、登校すると先ず、所謂、教会学校の分級のように、ふだんのクラス単位で、信者である担任の先生の御指導で聖書のお話を伺う。そのあと、現在の小講堂に集まり合同礼拝がある。その時は、当時の師範科（現在の保育科）の先生や、学生の方々が交替でお話をして下さった。今考えれば、これは学生の実習の一つでもあったのであろう。色々工夫が凝らされていて面白かった。これを「少女教会」と呼んでいた。三年になると、分級のあと、整列して、校庭の一辺にある屋根付の渡り廊下を通って隣接の麻布教会に出席する。聖壇の右側には聖歌隊席があって、そのメンバーは、教会員ではなく、女学科及び師範科の生徒約二十人位であった。練習は週日のお昼休みや放課後、音楽の先生の御指導に依った。又、YWCAの活動は幾つかの部に分かれていて、これも師範科の方々と御一緒であった。毎朝の礼拝も師範科生はギャラリーに着席、合同で行われ、奏楽は、ピアノ科の先生、音楽の先生、師範科の学生、ピアノ科上級の生徒などの交替であった。そういうわけで、女学科と師範科とは何かと交流する機会が多く、学生の人数が少なかったので、かなりよく覚えている。（師範科とは、正式には幼稚園師範科、女学科とは、高等女学科である。）

次に、卒業式のことを思い出す。当時制服は、セーラーの衿と袖口の金茶色の線は、小学科が一本、女学科が二本、師範科が三本で区別されていた。各科の卒業学年の生徒は、式の開始前に、小学科は赤、女学科はピンク、師範科は白のカーネーションを胸に留めて体育館に整列する。各科とも一列に、名簿の終りの方から順に小学部の列のあとに師範科生が左側に、女学科が右側に並ぶと大体人数が合って二列となる。司会者が、卒業生

入場」を告げると、奏楽と共に大講堂後部の扉が開かれて、歩調を合わせて行進、うしろの列に着く人から椅子の前に立ち、全員入場と同時に曲が終って着席するのである。入場を迎える、教師、在校生、父兄はすべて起立のまゝ、一人々々の緊張したまなざしに万感の想いをこめて歓迎する。この瞬間は、式が終って同じように退場してゆく卒業生を、惜別と祝福を以て見送る時と相対して、忘れ得ぬ感謝の時である。ところで、この入退場の形式は昭和八年以前の古い木造校舎の時代から続いていたものであった。勿論、手狭な講堂で、和服姿のことであるから、音がしないように白足袋でスリッパもはかず、ぢかに歩いた距離は、はるかに短かいものであったということである。新校舎設計の折には、この卒業式の入退場（Processional, Recessional）のことを十分に考慮して、現在の様な大講堂と体育館のつながりが、ミス・ハミルトン校長の構想の中に大きく位置を占めたのであろう。実に細部にわたって、機能的に、教育的に、しかも優雅に神経の行き届いたあの本館の建物に、私たちは讃美と敬意をこめた愛着を持っている。少し話がそれたが、卒業式々場大講堂のステージの正面には日英両国の国旗が下げられている。当時カナダはまだ独立国ではなく、英連邦となっていて、卒業式（及び創立記念式典）にはいつの日からか、カナダ公使が来賓として迎えられ祝辞が述べられるのに敬意を表してのことであろう。式場には俗に張りめぐらされる紅白の幔幕や花輪など一切なく、ステージに校旗と、テーブルにはガーネット色のビロードに金の縁どりのある重厚なクロスが掛けられ、その上に校色を示す黄色いらっぱ水仙が銀の鉢に一杯いけられている。（戦後はこの水仙を卒業生の数だけいけて、夕刻帰宅する卒業生に一本ずつ分けている。）式次第は、礼拝形式の中に卒業証書授与がある。これも、戦前は女学科三年以上は英語コースと家庭科コース（後者は２５％位）に分かれていて、英語コースの卒業生には英語の卒業証書も授与される。美しい書体で印刷され、校長先生のサインのある立派なもので、生まれて初めて見る英語の公文書であった。式辞とカナダ公使の祝辞は英語でなされ、それぞれ通訳を英語の先生がして下さった。当日のプログラムも、英語欄と日本語欄があったことは云うまでもない。最近十年位（？）英語欄はなくなったようである。私たちはこのプログラムにより、前述の Processional とか、Delivery of Certificate とか、Devotional Exercise というような言い回しを覚えたものである。在校生祝辞や卒業生答辞は型の如し。但し、各科から一人ずつで証書授与三人と合わせて九人の出入りがある。高女科卒業生全員による聖歌合唱も古い伝統で、一種の Choir であるから、卒業礼拝をも兼ねたこの卒業式には欠かせない。多くの曲が選ばれて来たようだが、最近は、ロッシーニの曲の「信仰・希望・愛」が二十年近く歌い継がれている。牧師による説教があり、校歌合唱、祝禱で式は終る。非常に内容の濃い、長い卒業式である。昭和三十年頃から、卒業式と卒業礼拝を分けて、卒業礼拝を前日に行うようになった。又、小学部校舎が離れた敷地に移ってからは、卒業式も短大、中高部、小学部が独自に行っているが、この古い形式をそのまま受け継いでいるのは高等部である。（幼稚園は以前から別）。

最後に、入退場の際の曲のことである。グスタフ・メルケル（１８２７～１８８５）による「祝祭行進曲」が実に永い間、弾き継がれて来ている。この人はウィーンの大オルガニストであったそうだ。有名な曲であるのかどうか、私は英和の卒業式以外では聴いたことがない。しかし、この５０年間毎年、卒業式のたびにこの曲に接するので、英和のために作られたのではないかと思いまがう程であり、あの大講堂と、晴れがましい卒業式の雰囲気にぴったり合っている。大正十三年に卒業された上田朝先生のお話に依ると、その時の卒業式に

もこの曲が弾かれた事が、この稿を書いている間に同先生と別の用件でお話しているうちに判明し、この部分を書き改めた。当時、音楽を担当していらしたミス・ハミルトンが、いつものように首を振り振りお弾きになったそうだ。だから、もう六十年以上、この曲は卒業生の歩みを導いていることになる。何とも不思議な、長い歴史である。

川島先生のお手紙から

川島京子先生より戦後のＹＷＣＡの活動について、次のようなお便りを頂いた。

『百年史では青年会の発足が昭和二十二年からとなっているが、昭和二十年、長野彌先生が東洋英和高等女学校校長就任と同時に青年会活動は再開された。終戦間近と直後に全てのものが瞬時停止した。先生は間髪を入れず「青年会活動を先ずやりましょう。生徒を集めてやって下さい」と川島に命ぜられた。二十年秋の事であった。教員室は本館４階の南端で、元の家庭科の裁縫室にあった。因に当時学校が使用していたのは校長室・事務室と４階だけであった。

聖書研究―大村勇牧師（阿佐谷教会）、YWCAの勉強会を川島の担当で開始した。

昭和二十一年、日本YWCA会長の植村環女史が米国政府より招聘され、五月二日に戦後海外へ渡った最初の日本人として渡米し、二十二年四月十二日に帰国された。学校ＹＷＣＡは京浜地区の各校が連絡を取り合いながら活動を続けた。

昭和二十二年第九回日本ＹＷＣＡ全国総会が川奈ホテル（当時英軍将校の宿舎だったのを英国軍側で解放してくれた）に於て十一月十一日から十四日に開催された。同年秋に世界ＹＷＣＡ総会がアジアで最初の中国を会場として行われた。然し日本の代表者はこれに出席出来なかったこともあって、この会に出席した各国のＹＷＣＡ代表多数が来日され、十一月の日本ＹＷＣＡ総会に出席された。日本ＹＷＣＡに加盟していた学校ＹＷＣＡは全国総会に出席して傍聴する機会が与えられた。然し残念ながらこの時英和では、まだ礼拝も身についておらず、生活訓練も十分にしていないので、そうした状態のまゝ、生徒を代表として送るには時期尚早という一部の強い意見により、生徒は不参加となり、川島一人が出席するようにということになった。

英和のＹＷＣＡの記録は和紙に筆で残された松尾先生のものから昭和二十六年卒旧姓大矢知さんが全部書き直したノートが残っている筈です。歴史を通して青年会の存在は英和の真の生命の在り方とも申せると思います。戦時中も戦後も一年のブランクもなく連綿として存続いたして参りました。如何なる時も皆の理解と支持があり守られて来たのです。英和がある限りその中にともに生きつづけるいのちです。』

以上のお便りからＹＷＣＡの記録を捜したが現在は紛失している。ただ昭和二十四年三月に発行された「東洋英和女学院中学部・高等部年報」の中に青年会の頁があり、その「聖書研究部報告」の中で当時の責任者高二芝原希代子さんが「昭和二十一年九月女子青年会の再発足以来」と書いている記事を見出すことが出来る。

あとがき

百周年を迎えて、英和も大きな転換期に入ろうとしている。移りゆくものと永遠に変らざるもの、変えてはならないものをしっかりと見つめて行くのが史料室委員会のつとめだと思う。百年のうち七十年、六十年を英和と共に歩んでこられた先生方から寄せられた声をこれからもしっかりと受けとめて行きたいと考えている。

（中・高部　沓沢・谷川・朽木）